Luncheon Linguistics
2017 年 11 月8日

スィンディー語における名詞修飾の実際

大学院総合国際学研究院　萬宮健策

0. このプロジェクトについて
1. 言語の概略
2. スィンディー語の名詞（相当語）
3. 名詞修飾の実例
4. 現時点でのまとめ

0. このプロジェクトについて

国立国語研究所で実施する共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」傘下のサブプロジェクトとして「名詞修飾表現」に関する共同研究（リーダー：プラシャント・パルデシ、サブリーダー：堀江薫）が位置づけられている [1]。

1. 言語の紹介・概略

- 現代インド・アーリヤ諸語(New Indo-Aryan)の1つ。話者人口約3千万（9割はパキスタンに居住。その8割はムスリム（イスラーム教徒）、残りの1割はインドに居住するヒンドゥー教徒）
- アラビア文字（52 文字）で表記。インドではデーヴァナーガリー文字を併用
- 人称接尾辞の多用、多重使役
- 開音節構造、入破音4つ/ɓ/ /ɗ/ /ʃ/ /ɠ/、鼻子音5つ/m/ /n/ /ɲ/ /ɳ/ /ŋ/

2. スィンディー語における名詞（相当語）と修飾語

以下に、スィンディー語で名詞相当語として機能する品詞を挙げる。同時に、それらを修飾することができる品詞群を挙げる。なお、スィンディー語では、たとえば、「武器輸出」や「事実確認」のような『名詞＋名詞』という構造は文法上許されず、それぞれ、「武器の輸出」、「事実の確認」というように、属格後置詞を付加して表現される。

2. 1. 名詞＜男性名詞と女性名詞＞

一般名詞で自然性を有するものはそれに従う。それ以外は全く恣意的に、語末の母音により男性名詞と女性名詞とに分類される [2]。語彙によっては、どちらにも分類されるものもある。また、格変化も語末の母音の変化で示される [3]。固有名詞（地名、人名）についても語末の母音に応じた格変化をする。

2. 2. 動詞不定詞

動詞不定詞は、例外なくその語尾が=aṇu（自動詞と、一部の他動詞）、もしくは=iṇu（多くの他動詞と、全ての使役動詞）で終わり、動名詞として機能する。その際、語尾が-u で終わる男性名詞と

---

[1]プロジェクトのウェブサイト：　http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/noun/
[2]主格の場合、語尾が-ō, -u は男性名詞、-ī, -a は女性名詞に分類される（一部例外あり）。
[3]主格、後置格、呼格の3種。それ以外の格は、後置詞(postposition)で示される。

同じ変化をする。語尾の前の不変化の部分を語幹と呼ぶ。

pahc=aṇu（到着する）　　ḡālhā=iṇu（話す）

2. 3. 動詞分詞＜未完了分詞、完了分詞＞

未完了分詞は、その語尾が=ãdaṛu もしくは=ĩdaṛu、完了分詞はその語尾が=(y)alu でそれぞれ終わり、動名詞、もしくは形容詞として機能する。動詞不定詞と同様に、-u で終わる男性名詞と同じ変化をする。

pahc=ãdaṛu	/ paht=alu
到着すること（人）、到着する	/ 到着したこと、到着した
ḡālhā= ĩdaṛu	/ ḡālhā=yalu
話していること（人）、話している	/ 話したこと、話した

3. スィンディー語における名詞修飾

本節では、具体例を提示しつつ、スィンディー語の名詞修飾の構造を考察する[4]。

3. 1. 形容詞＋名詞

(1) waḏō　　gharu
大きい NOM.M.SG.　　家 NOM.M.SG.（大きい家）

(2) hīu　waḏō　　nīlō　　gharu
この　大きい NOM.M.SG.　　青い NOM.M.SG.　　家 NOM.M.SG.
（この大きい青い家）

(3) hina　waḏē　　nīlē　　ghara
この　大きい OBL.M.SG.　　青い OBL.M.SG.　　家 OBL.M.SG.
meṇ　kō　　na　　āhē.
LOC.　誰 NOM.　　NEG.　　いる PRS.SG.（この大きい青い家には誰もいない）

(4) hīu　gharu　　waḏō　　āhē.
この　家 NOM.M.SG.　　大きい NOM.M.SG.　　COP.PRS.3.SG.（この家は大きい）

3. 2. 代名詞＋名詞

(5) mũhĩjo　　puṭu
私 GEN.NOM.M.SG.　　息子 NOM.M.SG.（私の息子）

(6) mũhĩjā　　puṭa
私 GEN.NOM.M.PL.　　息子 NOM.M.PL.（私の息子たち）

---

[4] 本稿で用いるグロスは、https://www.eva.mpg.de/lingua/pdf/Glossing-Rules.pdf に基づいている。それ以外では、PRON: Pronominal（人称代名詞）、PS: Pronominal Suffix（人称接尾辞）、CONJ: Conjunctional（接続分詞）。

(7) hīu　kitābu　/　hikṛō　kitābu
この NOM.M.SG.　本 NOM.M.SG.　ある NOM.M.SG.　本 NOM.M.SG.
(7a) hīa　chōkirī　/　hikṛī　chōkirī
この NOM.F.SG.　少女 NOM.F.SG.　ある NOM.F.SG.　少女 NOM.F.SG.

(8) hīu　mũhĩjo　puṭu　āhē.
これ　私 GEN.NOM.M.SG.　息子 NOM.M.SG.　COP.PRS.SG.
（これは私の息子です。）

(9) asã̃jō　pākistāna　waňaṇa　jō
我々GEN.NOM.M.SG　パキスタン OBL.　行く INF.OBL.　GEN.NOM.M.SG.
irādō
意志 NOM.M.SG.　（我々がパキスタンへ行く意志）

3. 3. 名詞＋人称接尾辞（親族名称等に限定される）

(10) puṭu=mi　bi　hitē　ĩdō.
息子 NOM.M.SG.=PS.1.SG.　も　ここ　来る FUT.3.M.SG.
（私の息子もここに来るだろう）

(11) puṭa=ni　sã̃　puchō.
息子 OBL.M.SG.=PS.3.PL.　ABL.　尋ねる IMP.PL.（彼らの息子に尋ねて下さい）

3. 4. 動詞分詞

3.4. 1. 未完了分詞

hal=aṇu -> hal=ãdō -> hal=ãdaṛu（動く）

(12) halãdaṛi　gāḍī
走る IPFV-PTCP.NOM.F.SG.　車 NOM.F.SG.（動いている車）

(13) hūa　gāḍī　halãdaṛi　āhē.
それ NOM.F.SG.車 NOM.F.SG.　走る IPFV-PTCP.NOM.F.SG.　COP.PRS.SG.
（この車は動いている）

(14) halãdaṛi　gāḍīa　nazdīka　na
走る IPFV-PTCP.OBL.F.SG.　車 OBL.F.SG.　近く ADV.　NEG.
acō
来る IMP.PL.（走っている車の近くに行かないでください）

3.4.2. 完了分詞

khul=aṇu -> khul=iyo -> khul=iyalu（開く）

(15) khuliyalu　　daru
開く PRF-PTCP.NOM.M.SG.　　ドア NOM.M.SG.（開いたドア）

(16) hīu　daru　　khuliyalu　　āhē.
この ドア NOM.M.SG.　開く PRF-PTCP.NOM.M.SG.　　COP.PRS.SG.
（このドアは開いています。）

(17) una　khuliyala　　dara　　khã̄　　b̄āhari
あの 開く PRF-PTCP.OBL.M.SG.　ドア OBL.M.SG.　ABL.　外へ ADV.
waňō
行く IMP.PL.（あの開いたドアから外へ出てください。）

(18) machī　　pacāĩdaṛu　　māṇhō
魚 NOM.F.SG.　　焼く IPFV-PTCP.M.SG.　　男 NOM.M.SG.
(18a) machī　　pacāiṇa　　wārō　　māṇhō
魚 NOM.F.SG.　　焼く INF.OBL.　　PTCL.M.SG.　　男 NOM.M.SG.
（魚を焼く（焼いている）男）

(19) machīa　　pacāiṇa　　jī　　būi
魚 OBL.F.SG.　　焼く INF.OBL.　　GEN.NOM.F.SG.　　におい NOM.F.SG.
(19a) machīa　　pacāiṇa　　khã̄　　acaṇa　　wārī
魚 OBL.F.SG.　　焼く INF.OBL.　　ABL.　　来る INF.OBL.　　PTCP.F.SG.
būi
におい NOM.F.SG.　　（魚を焼くにおい）

3. 5. 接辞 wārō

(20) sabzī　　wārō
野菜 F.SG.　　人 M.SG.（八百屋）

(21) hitē　acaṇa　　wārō
ここ　来る INF.OBL.　　人 M.SG.（ここに来る人（男性））

(22) ṭōkyō isṭēšana　　acaṇa　　wārī　　gāḍī
東京駅 OBL.　　来る INF.OBL.　　PTCP.F.SG.　　列車 NOM.F.SG.
(22a)ṭōkyō isṭēšana　　ĩdaṛi　　gāḍī
東京駅 OBL.　　来る IFPV-PTCP.F.SG.　　列車 NOM.F.SG.
（東京駅に来る列車）

(22b) ṭōkyō isṭēšana　　āyali　　gāḍī
東京駅 OBL.　　来る PRF-PTCP.F.SG.　　列車 NOM.F.SG.
（東京駅に来た列車）

(22c) ṭōkyō isṭēšana　na　acī　saghiyali　gāḍī
東京駅 OBL.　NEG.　来る CONJ-PTCP.　できる PRF-PTCP.F.SG.　列車 NOM.F.SG.
（東京駅に来られなかった列車）

(23) hū　miṭṭhō　jēkō　huna　khādhō āhē
その　お菓子 NOM.M.SG.　関代　彼 OBL.SG.　食べる PRS-PFV.M.SG.
（彼が食べた（ことがある）お菓子）

(23a) huna　jō　khādhalu　miṭṭhō
彼 OBL.SG.　GEN.NOM.M.SG.　食べる PRF-PTCP.M.SG　お菓子 NOM.M.SG.
（彼が食べたお菓子）

(23b) huna　jō　khāĩdaṛu　miṭṭhō
彼 OBL.SG.　GEN.NOM.M.SG.　食べる PRS-PTCL.M.SG　お菓子 NOM.M.SG.
（彼が食べているお菓子）

(23c) huna　jō　khāiṇa　wārō　miṭṭhō
彼 OBL.SG.　GEN.NOM.M.SG.　食べる INF.OBL.　PTCL.M.SG.　お菓子 NOM.M.SG.
（彼が食べるお菓子）

(24) šarābu　piyaṇu　burī　gālhi
酒 NOM.M.SG　飲む INF.　悪い ADJ.F.SG.　こと NOM.F.SG.
āhē.
COP.PRS.SG.（酒を飲むことは悪いことだ）

(24a) šarābu　pĩdaṛu　burō　āhē.
酒 NOM.M.SG.　飲む PRS-PTCL.M.SG　悪い ADJ.M.SG.　COP.PRS.SG.
（酒を飲んでいる人は悪い）

4.　現時点でのまとめ

名詞および名詞相当語を修飾することができるのは、代名詞、形容詞、動詞の各分詞および、関係詞で導かれる節である。それ以外に接辞 wārō を用いることにより、名詞節を修飾語として用いることができる（例文(22)、(23c)ほか）。

一方で、接辞 wārō を用いる文と、動詞の各分詞を用いる文との意味上の差異がどの程度あるのかについては、今後の確認作業が必要である。

また、今回の報告では、いわゆる「外の関係」については、触れられていない。たとえば、寺村(1981)が提唱した「外の関係」のうち、「誰かが階段から降りてくる音がした」や、「これは女房の幽霊が、三年目になってようやくあらわれる話である」、「火事が広がった原因は空気が乾燥していたことです」に相当する文がスィンディー語でどのように表されるのか、という点が当面の課題である。

なお上記の例文は、スィンディー語の文法構造上、上述の接辞 wārō、もしくは未完了分詞を用いて表現できる可能性が残されているが、未検証であるので、ここでは例文を提示するのみに留め

ておく。

(25) kãhĩ	jō	hēṭhiyani	manzila	tarafa
誰か OBL.SG.	GEN.M.	下の ADJ.OBL.	階 OBL.F.SG.	方角 OBL.F.SG.
lahaṇa	wārō	āwāzu	āyō āhē.	
降りる INF.OBL.	PTCL.M.SG.	音 NOM.M.SG.	来る PRS-PFV.M.SG.	
(25a) kãhĩ	jō	hēṭhiyani	manzila	tarafa
誰か OBL.SG.	GEN.M.	下の ADJ.OBL.	階 OBL.F.SG.	方角 OBL.F.SG.
lahãdaṛu		āwāzu	āyō āhē.	
降りる PRS-PTCL.NOM.M.SG.		音 NOM.M.SG.	来る PRS-PFV.M.SG.	

（誰かが階段から降りてくる音がした）

参考文献

alānā, ǧulām alī. 1984. ***sindhī muallim.*** haidarābād (sindh): sindhī adabī bōrḍu. (Sindhi Self-taught)

Lakiari, Sayyad Qalandar Shah. (ed.) 2006. ***The Oxford elementary learner's English Sindhi dictionary.*** Karachi: Oxford University Press.

Lekhwani, Kanhaiyalal. 1987. ***An intensive course in Sindhi.*** Mysore (India): Central Institute of Indian Languages.

寺村秀夫, 1981.『日本語の文法（下）』, 日本語教育指導参考書5, 東京：国立国語研究所